

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

引　　塚　　遺　　跡  
笹　　原　　遺　　跡

## 序

この「引塚」および「笹原」両遺跡の埋蔵文化財発掘調査は、昭和62年度の「県営ほ場整備事業」の施工に先立って実施しました。

引塚遺跡は塚跡として周知され、古墳との説もありましたが、その形態や規模等は不明のまま語り継がれてきていました。今回の調査では、それを明らかにすることはできませんでした。しかし、住居の遺構や土器片の発見により、付近一帯に先人の定住していたことを知る事ができました。

笹原遺跡は、昭和59年度に実施した埋蔵文化財の分布調査で、地表に散乱していた土器片から、住居跡と推定していました。古くから周知されてはいませんでしたが、今回の発掘で歴然とした住居の遺構が認められ、推定の正しかったことが裏付けされました。

両遺跡とも、10世紀以降のものとの推測されますが、さきの調査で「長岡郷長の館跡」と推定された「北方田中遺跡」に程近く、「長岡郷」の解明には有力な手がかりになるものと思われます。

本報告書が、埋蔵文化財保全と期界の研究文献として、大きな役割りを果たすことを期待いたします。

昭和63年3月

山東町教育委員会

教育長 西 秋 良 策

## 例 言

1. 本報告は、山東町における昭和62年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果である。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会の依頼にもとづき、山東町教育委員会社会教育課が実施した。
3. 本書には、坂田郡山東町引塚遺跡・笹原遺跡の2遺跡を収載した。
4. 調査・整理には、林 孝好・円城伸彦・安田正浩・仲谷良徳・武立信明・谷口千夏・谷沢雅香子の参加・協力を得た。また、遺物写真については、寿福 滋氏（寿福写房）を煩わした。記して感謝を表したい。
5. 調査および本書の作製については、山東町教育委員会社会教育課、主事・桂田峰男が担当した。

# 目次

序

例言

挿図

## 1. 坂田郡山東町引塚遺跡

I. はじめに	1
II. 位置と環境	1
III. 検出遺構	2
IV. 出土遺物	3
V. おわりに	4

## 2. 坂田郡山東町笹原遺跡

I. はじめに	5
II. 位置と環境	5
III. 検出遺構	6
IV. 出土遺物	8
V. おわりに	10

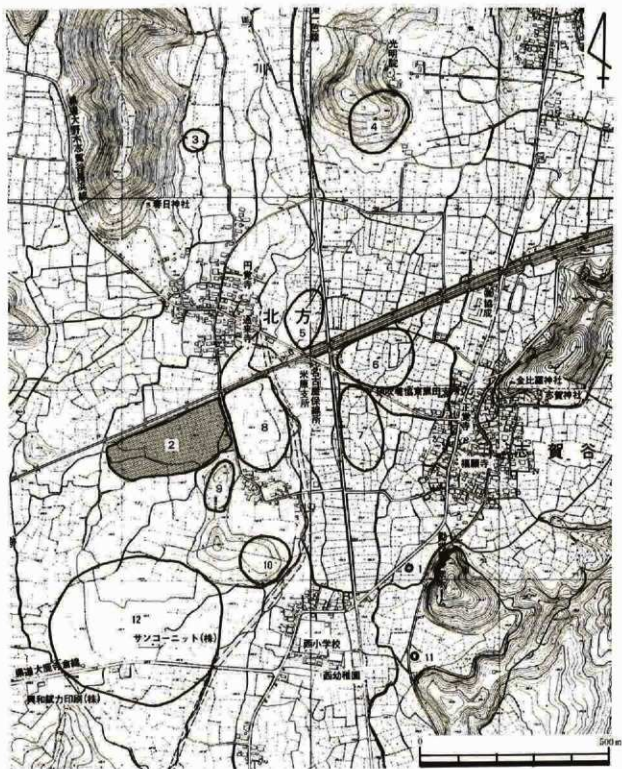
## 図版目次

### 1. 引塚遺跡

- 図版一 T-1~3トレンチ配置図  
図版二 T-1~3トレンチ遺構図  
図版三 T-1~3トレンチ断面図  
図版四 出土遺物実測図  
図版五 ㊦ 引塚近景  
                  ㊧ T-1トレンチ全景（北から）  
図版六 ㊨ T-3トレンチ（北から）  
                  ㊩ 塚断面状況（北から）  
図版七 ㊪ 塚表土除去後  
                  ㊫ 出土遺物

### 2. 笹原遺跡

- 図版一 T-1~6トレンチ配置図  
図版二 T-1~5トレンチ遺構図  
図版三 T-6トレンチ遺構図  
図版四 掘立柱建物（SB-01）  
図版五 T-1~6トレンチ断面図  
図版六 出土遺物実測図  
図版七 ㊬ 調査地遠景  
                  ㊭ T-2トレンチSB-01（南から）  
図版八 ㊮ T-5トレンチ（西から）  
                  ㊯ T-6トレンチ（東から）  
図版九 ㊰ T-6トレンチ（北東から）  
                  ㊱ T-6トレンチ遺物検出状況  
図版十 ㊲ T-6トレンチ全景  
                  ㊳ 出土遺物



- |           |           |          |
|-----------|-----------|----------|
| 1. 引塚遺跡   | 2. 笹原遺跡   | 3. 塚木古墳  |
| 4. 池下城跡   | 5. 東良遺跡   | 6. 西代遺跡  |
| 7. 時重遺跡   | 8. 北方田中遺跡 | 9. 孤草山古墳 |
| 10. 道照寺遺跡 | 11. 馬塚古墳  | 12. 大鹿遺跡 |

挿図 調査地周辺図

# 1. 坂田郡山東町引塚遺跡

## I. はじめに

本報告は、県営ほ場整備事業に伴う引塚遺跡の埋蔵文化財発掘調査にかかるとのである。

引塚遺跡は、山東町の中央部から北西に向った大字志賀谷地先に所在し、従来から周知されていた塚である。

昭和62年、滋賀県農林部より県営ほ場整備事業について、埋蔵文化財の有無等につき照合がなされ、滋賀県教育委員会からの依頼により、同年4月、山東町教育委員会が試掘調査を実施した。

試掘調査は、現存する塚を中心に十文字にトレンチを設定し、引塚の範囲や遺構の有無を確認することとした。

調査の結果、直接引塚に関連のある遺構は確認できず、また、検出された掘立柱建物跡や溝は、ほ場整備事業の工事計画などにかからないことなどから、現状保存の見地から、現存する引塚及び試掘トレンチのみの調査を行なうこととした。

調査は、昭和62年4月6日より同年4月16日までで、以後は出土資料の整理調査を実施した。

尚、調査面積は、約500㎡であった。

## II. 位置と環境

山東町は、北に伊吹山南麓、西に横山丘陵、南・東は帯仙・鈴鹿山系と、町の四方を山々に囲まれた地形を有する。その盆地状地形に、天野川・黒田川が流れ、また、多数の低小丘が点在するなど複雑多岐の様相を呈している。

今回調査した引塚遺跡は、山東町志賀谷の南地先に所在する。西に連なる横山丘陵から突き出す舌状丘陵にはさまれた谷段丘地から広がるこの地は、北端を西流する姉川と、横山丘陵に並走し南流する黒田川によって肥沃な平野部を形成している。そして、この平野部において黒田川に沿うかのように、現集落を形成すると共に、周知されている多くの遺跡が点在するのである。これら点状の遺跡は、古くは古墳時代から始まり、平安時代に至るまでの長い歴史の中に生きていたもので、引塚遺跡もその一つである。



### Ⅲ. 検 出 遺 構

今回の調査は、前述したように引塚の範囲を確認することを主目的とし、引塚を中心に十文字に3つの試掘トレンチを設定したが、その範囲は最小に限られ、また関連する遺構を確認し得なかった。

しかし、T-1～T-3の試掘トレンチにおいて、掘立柱建物跡2棟・溝跡8条などが検出された。これらの各遺構について記することとする。

#### 1. 塚

耕作土上に現存していたもので、最大径約0.6m・高さ約0.2mと小規模なもので、ほぼ円形を呈している。試掘による断面観察において、塚の最大径で深さ約0.2mまでは暗灰茶色粘質土層が充填しており、地上から地下約0.1mのところまで数個のグリ石の混入を認めた。これらの他に塚としての遺物の出土を見ないことなどから、作務的なものであるかも知れないが、塚と埋葬の関連はかなり希薄であるのではないかと考える。

また、地表部分を除去したところ、前述したグリ石がやや楕円形を呈した形で検出された。この最大径は約0.4mを計り、塚よりもひと廻り小さくなる。これらの意味・性格については不詳である。関連が希薄なこの塚において、このような列石とでも言う遺構が検出されたことは、不可思議であり、より一層の検討を要するものである。

#### 2. 掘 立 柱 建 物 跡

##### 〔SB-01〕

T-1トレンチ北端隅で検出されたN-16°-Wを保つ掘立柱建物跡である。北東部と南東部過半がトレンチ外へ伸びるため規模は不明である。桁行1間以上、梁行2間以上を数える。掘り方は、0.2m前後の円形を基調としている。柱筋は一例を除いてほぼ通っている。柱間は桁行が南より0.6m、梁行が西より0.6・0.4mとやや不揃いである。

##### 〔SB-02〕

T-3トレンチ南側で検出されたN-16°-Wを保つ掘立柱建物跡である。北西部と南西部過半はトレンチ外に伸びるため規模は不明であるが、桁行2間以上、梁行1間以上を数える。掘り方は、0.5～0.7mの楕円形を基調としているが、隅丸方形を示すものも認められる。また、検出したすべてに柱痕が認められ、その径は0.2m前後を計る。柱筋は一例を除いて通っており、柱間は、桁行が北から1.3・1.9m、梁行が東から0.8mと不揃いで一定していない。

## IV. 出土遺物

今回の調査は、調査面積も非常に小さいこともあり、出土遺物も無に等しい状態であった。そうした中で出土した僅少な遺物は、全てがT-3トレンチの第3層（暗茶褐色粘質土層（混小礫））から出土している。そしてこの層から、土師器・青磁器などが出土し、11世紀から中世に及ぶと考えられる。以下、まとめて記述することとする。

### 土師器

①～③は、土師器の小皿である。①は口径9cmを計り、平底で口縁部でわずかに外上方へ伸びる。口縁端部は比較的尖り気味に収まる。内面底部にナデ痕が認められるが、外面はやや粗雑である。色調は淡茶灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。②は①よりやや大きく、復元口径10cmを計る。平底からなだらかに立ち上がり、口縁部ではほぼ上方へ伸びる。口縁端部は尖り気味に収まる。色調・胎土・焼成ともに①と同様である。③は①とほぼ同量の小皿で、復元口径8.8cmを計る。形態も①②と大差はないが、外面にいくつかの指圧痕がみられる。調整は内外面ともにやや粗雑である。色調・胎土・焼成ともに①・②と同様である。

### 陶器

陶器口縁部④である。復元口径は28cmを計る。体部から外上方へ立ち上がり、口縁部でわずかに内湾気味となり、鈍い凹状を呈する。口縁端部は丸く収まる。体部外面の上部及び下部に2条の沈線が施されている。また、口縁端部並びに内外面上部 $\frac{1}{2}$ に軸が認められる。色調は、暗灰白色を呈し、胎土はやや不良、焼成は良好である。

### 磁器

⑤は青磁の碗口縁体部である。復元口径は14.4cmを計り、体部よりなだらかに立ち上がって口縁部に至る。口縁端部は丸みをおびて収まる。全体ロクロで成形し、断面の色調は淡青白色を呈する。色調は緑灰色、胎土・焼成ともに良好である。

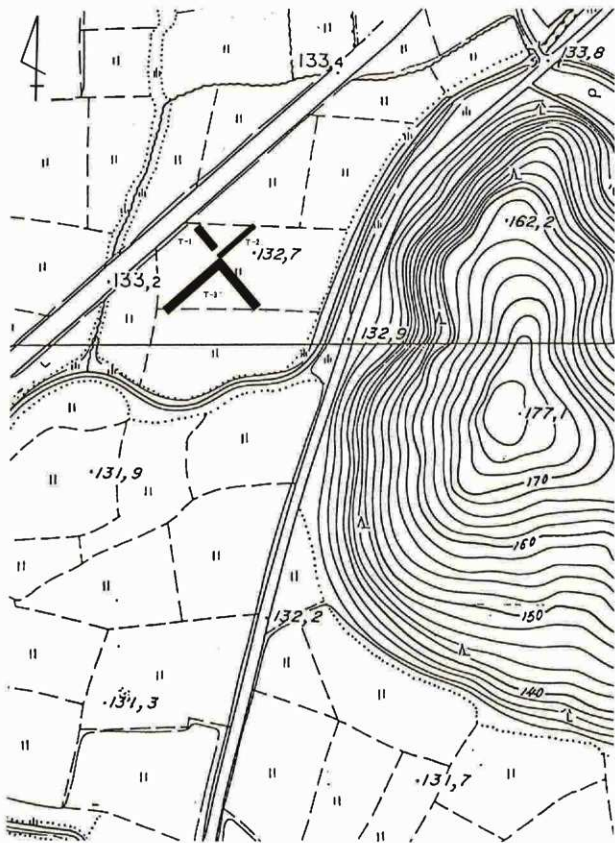
## V. お わ り に

今回の調査は、地表面で現存する引塚遺跡の範囲を確認することを当初の目的としたが、その範囲は予想以上に小さく、そして、関連する遺構の検出を確認し得なかったこと、また、前述した調査の経過などから、試掘という形でその幕を閉じることとなった。

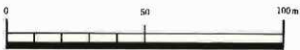
しかし、塚内部より検出された列石とも言ふべきグリ石群は、意味・性格など不詳と言わざるを得ないが、人為的・作爲的であり、何らかの事情により意図的に作られたものではないかと思われる。

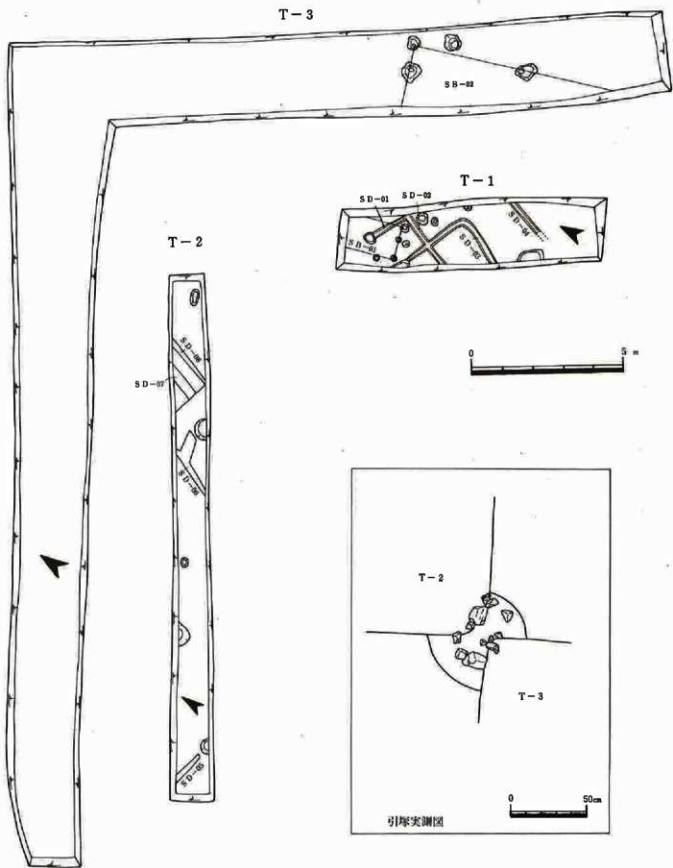
また、塚との関連はないが、孤立柱建物跡が検出されたことは、今まで考えられていなかった集落の存在を確認するとともに、現大字志賀谷の南限を拡大し明確にした意義は大きいのではないだろうか。

今回の調査では、面積的に狭小であり、また、出土遺物も僅少で、土師器・青磁器数点を除くと皆無であったことなどから、これらが同一層からの出土であっても、その遺物を包含する層自体が遺構の埋土であるのか、あるいは単なる遺物包含層であるのかは確認できなかった。今回の調査で明らかにできなかったことは、今後の調査・研究に期待して、まとめとする。



T-1~3 トレンチ配置図





T-1~3 トレンチ遺構図及び引塚実測図

T-1, 3

SE  
137.80



T-3 | (T-2)

T-1



T-2, 3

SW  
137.80

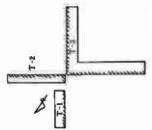


T-3 | T-2

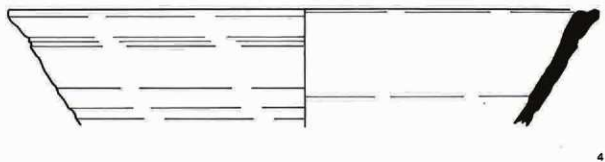
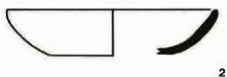


T-1 ~ 3 トレンチ断面図

- 1 粘土 (明末紅色土層)
- 2 粘土層
- 3 粘土層
- 4 腐植土層
- 5 腐植土層
- 6 腐植土層
- 7 腐植土層
- 8 腐植土層
- 9 腐植土層



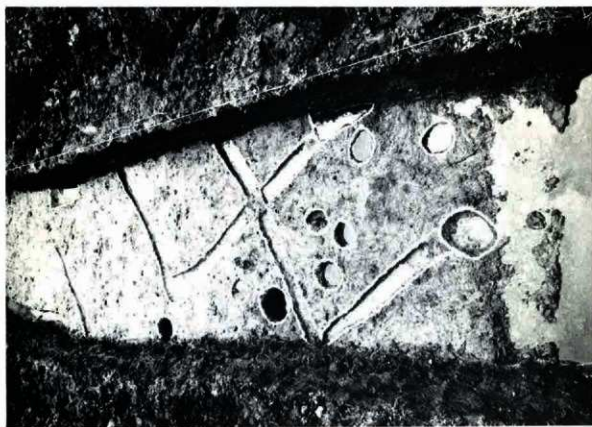
川原図



出土遺物実測図

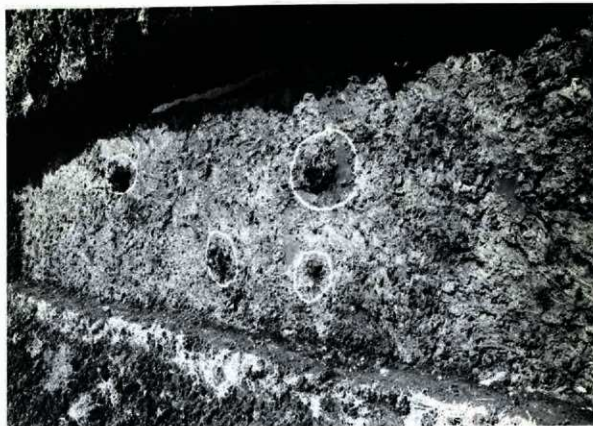


引塚近景



T-1トレンチ全景 (北から)





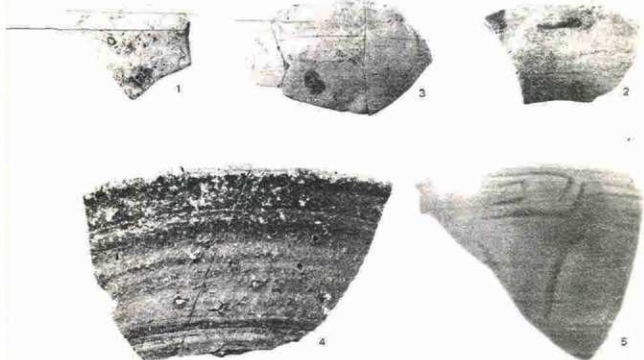
T-3 トレンチ (北から)



塚断面状況 (北から)



塚表土除去後



出土遺物

## 2. 坂田郡山東町笹原遺跡

## I. は じ め に

本報告は、県営ほ場整備事業に伴う笹原遺跡の埋蔵文化財発掘調査にかかるものである。

笹原遺跡は、山東町の西部、大字北方地先に所在する。

笹原遺跡は、従来から周知されていた遺跡ではなく、昭和62年、県営ほ場整備事業が計画されたが、その東側には北方田中遺跡が隣接しており、昭和59年度に滋賀県教育委員会が実施した発掘調査によって、8世紀から9世紀にかけての郷長クラスの建物跡や門跡が検出され、多量の土器類が出土した。このことから北方田中遺跡と関連する建物跡が存在する可能性があるとして、長浜県事務所土地改良課と協議の結果、山東町教育委員会が試掘調査を実施することとなった。

その結果、掘立柱建物跡などの集落跡が存在することが判明したので、遺跡認定を受け、発掘調査を実施することにした。

調査は、昭和62年4月13日より同年6月10日までで、以後は出土資料の整理調査を実施した。

尚、発掘調査面積は、約1,500㎡（他、設計変更約2,700㎡）であった。

## II. 位 置 と 環 境

今回の調査地は、山東町大字北方字笹原に所存する。そして、この地は北方集落の南西に位置しており、地目は全て水田であった。現在の標高は、132.8m～133.6m付近で、ほとんど起伏のない平地であった。

調査地の東を横山丘陵に沿うように黒田川が南流し、山東町柏原に水源をもつ天野川と合流して、近江町世継を経て琵琶湖に注いでいる。これら両河川と山東町北端を西流する肥沃な平野部に立地する。

また、調査地の北側には多くの掘立柱建物跡などがみつかった上向川遺跡があり、西には小倉山しゅうけ塚遺跡、南には瓢箪山古墳や法泉寺遺跡が所在し、重孤文軒平瓦などが出土している。そして、東には前述したように北方田中遺跡が隣接しており、17棟以上の建物跡や多量の遺物が出土している。今回の調査地は、北方田中遺跡と関連のある集落跡ではないかと期待されるものである。

### Ⅲ. 検 出 遺 構

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡7棟、槽跡1列、主たる溝跡11条、土壌などである。遺構は、遺跡の東側において密度が高くなっている。

#### 1. 掘 立 柱 建 物 跡

掘立柱建物跡として確認し得たのは、7棟（SB-01～07）である。ただ、今回の調査では確認できなかったが、柱穴の遺存状況からまだ多数の建物が存在していたものと考えられる。

##### 〔SB-01〕

T-2 トレンチ西側で検出されたN-1°-Eの方位を保つ掘立柱建物跡である。桁行3間（4.7m）、梁行2間（3.5m）を数える。掘り方は、0.4～0.7mの円形を基調としているが、楕円形などを示すものもあり、必ずしも一定していない。柱筋は各柱列とも非常によく通っている。柱間は、桁行が北から各々ほぼ1.5m、梁行が西から各々ほぼ1.7mとよく揃っている。

##### 〔SB-02〕

T-2 トレンチ南西端、SB-01南側で検出されたN-1°-Eの方位を保つ掘立柱建物跡である。北部分以外のすべてがトレンチ外に伸びるため規模は不明であるが、SB-01と同程度のもではないかと考えられる。梁行2間（3.8m）を数える。掘り方は、0.3～0.5mの円形を呈している。柱筋は1例を除いて通っており、柱間は梁行が西から1.8m・2mとわずかに不揃いである。

##### 〔SB-03〕

T-2 トレンチ南東端、SB-02東側で検出されたN-1°-Eの方位を保つ掘立柱建物跡である。SB-02同様大半がトレンチ外へ伸びるため規模は不明である。梁行4間（3.6m）を数える。掘り方は、0.3m前後の円形を基調としているが、楕円形・隅丸方形などを示すものもあり、一定していない。柱筋はあまり通っているとは言えない。柱間は梁行が西から1.5・0.5・1.5mである。

##### 〔SB-04〕

T-6 トレンチ北東隅で検出されたN-109°-Wの方位を保つ掘立柱建物跡である。東部がトレンチ外へ伸びるため規模は不明である。桁行2間以上、梁行1間（2.4m）を数える。掘り方は、0.3～0.5mで円形・楕円形を呈している。柱筋は比較的通っていると思われる。柱間は桁行が西から1.7・1.8m、梁行が北から2.4mである。

##### 〔SB-05〕

T-6 トレンチ北西隅で検出されたN-75°-Wの方位を保つ掘立柱建物跡である。桁行2間（3.6m）、

梁行2間(2.2m)を数える。掘り方は、0.3~0.5mの円形・楕円形を呈している。柱筋は北西部梁行は通っているが、他は通っているとは言い難い。柱間は桁行が西から1.3・2.3m、梁行が北から1.1・1.1mである。

#### 〔SB-06〕

T-6トレンチ東端で検出されたN-20°-Wの方位を保つ掘立柱建物跡である。桁行2間以上(2.3m)、梁行2間以上(1.7m)を数える。掘り方は、0.3m程の円形を基調としている。柱筋は2例を除いて通っている。柱間は桁行が南から0.9・1.0m、梁行が東から1.0mで不揃いである。

#### 〔SB-07〕

T-6トレンチ南東部で検出されたN-11°-Wの方位を保つ掘立柱建物跡である。桁行2間(2.3m)、梁行1間以上(1.7m)を数える。掘り方は、0.3~0.6mの円形・隅丸方形を呈している。柱筋は2例を除いて通っている。柱間は桁行が北から1.4・0.9m、梁行が西から1.7mである。

## 2. 槽 跡

#### 〔SA-01〕

T-6トレンチ東端において5間分(4.9m)の槽跡が検出された。N-13°-Wの方位を保ち、柱筋はよく通っている。掘り方は、0.2m前後の円形を呈している。柱間は北から1.5・0.9・0.9・0.8・0.8mと1間を除けばよく揃っている。

## 3. 溝 跡

総体的に各トレンチから検出されており、幅0.5m前後、深さ0.2m前後を計る。埋土は、暗黒茶色粘質土及び暗灰茶色粘質土が充填していた。これらの溝跡からは遺物が皆無と言ってよい程出土しておらず、単に近世耕作時の暗渠排水路と断定できるものではないと思われる。また、現畦畔に対応するものもあることから、旧畦畔に対応する可能性をもっているのではないだろうか。

## IV. 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、そのほとんどが土師器で、皿・杯身などである。また、出土地点もほぼT-6トレンチに限られており、量的には僅少であった。

出土遺物の時期としては、12世紀後半から14世紀に及ぶものと考えられる。以下、各遺跡ごとに記述することとする。

### 〔SB-01〕〔Pit-2〕

土師質の皿は、口径の法量により小皿①～④と中皿⑤に分類できる。

①は、復元口径7.7cm、器高1.0cmをはかり、平底で体部に鈍い稜を施す。口縁部は内湾気味となり、端部は丸く収まる。全体的成形はかなり粗雑で、ヨコナデ調整である。色調は淡黄灰色、胎土・焼成は良好である。②は①よりもわずかに大きく、復元口径8.2cm・器高1.5cmを計る。平底からなだらかに立ち上がり、口縁部は内湾気味となる。ヨコナデ調整が施こされ、底部内面にナデ痕が認められる。色調は淡赤褐色を呈し、胎土・焼成は良好である。③は②とほぼ同じで、復元口径8.0cm・器高1.2cmを計る。成形・調整は②とあまり変化はなく、色調なども同一である。④は復元口径7.7cm・器高1.7cmと口径に比して器高が高い。平底から内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に収まる。

⑤は、口径の法量により中皿に分類され、復元口径12cm、器高2cmを計る。平底で体部中央部で屈曲して立ち上がり、口縁部でほぼ真上に伸びる。口縁端部は尖り気味に収まる。内面底部端に指圧痕が認められる。色調は淡赤褐色、胎土・焼成は良好である。

土師質雙口縁部⑥は、頸部は外傾しながら立ち上がり、口縁部で内湾する。口縁部は内側に折り返し、口縁帯を作る。また、外部全体に墨が付着している。復元口径25.5cmで、色調は黒赤色、胎土・焼成ともに良好である。

### 〔Pit-1〕

⑦は、土師質の小皿で、復元口径8.2cm、器高1.5cmを計る。安定性のない底部よりなだらかに立ち上がり、体部中央で屈曲する。口縁端部は丸く収められる。調整はヨコナデが施こされ、内面底部にはナデ痕が認められる。色調は淡茶灰色、胎土・焼成は良好である。

### 〔SK-01〕

土師器皿⑧～⑪は、小皿⑧⑨⑩と中皿⑪に分けられる。

⑧は、口径8.3cm、器高1.1cmをはかり、平底から体部下方で屈曲し、口縁部へ至る。口縁部は内湾気味で、端部は丸味をおびて収まる。調整はヨコナデを施す。色調は淡茶灰色、胎土・焼成は良好である。⑨とほぼ同量の口径をもつ⑩は、復元口径8.4cm、器高1.5cmを計る。内面にははっきりとしたヨコナデ調整痕が認められる。色調は淡赤褐色で、胎土・焼成は良好である。前述の2皿に比してわずかに大

きい⑩は、復元口径9cm、器高1.3cmを計る。平底から大きく外傾し、体部中央で屈曲して稜をなす。口縁端部は丸味をおびている。底部外面は丁寧なナデを施こす。色調は淡茶灰色である。

中皿に分けられる⑪は、復元口径9.7cm、器高1.6cmを計る。平底より内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は、内傾面で肥厚する。内面はヨコナデ調整され、外面底部端に指圧痕が認められた。色調は淡赤褐色を呈している。

### 〔第 3 層〕

⑫⑬は、T-6トレンチ第3層から出土したもので、土師器杯身である。⑫は、復元口径12.8cmを計る。体部上方でわずかに屈折内傾する。⑬は、復元口径11.7cm、器高3cmを計る。平坦な底部面から外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。体部中央でわずかに内傾気味となる。外面底部の他はヨコナデ調整を施こす。色調は淡茶灰色で、胎土・焼成ともに良好である。

### 〔SX-01〕

⑭は、口径9cm、器高1.6cmを計る土師器小皿である。全体的にかなり歪んでいるが、平底からなだらかに伸びて口縁部に至る。内面はヨコナデが施こされている。色調は淡茶灰色を呈している。



## V. お わ り に

今回の調査では、掘立柱建物跡・溝跡などの遺構が検出され、僅少ではあるが12世紀後半から14世紀にかけての土師器皿片などの遺物の出土をみた。

当初、当遺跡の東に北方田中遺跡が隣接しており、関連する集落跡ではないかと予想されたが、北方田中遺跡は8世紀後半から9世紀にかけての遺構群であり、<sup>註①</sup> 時期的に少し後世に下るものであった。ただ、北方田中遺跡で、13世紀のもつとされる井戸跡が見つかっており、この点においては相対する時期を有するものである。

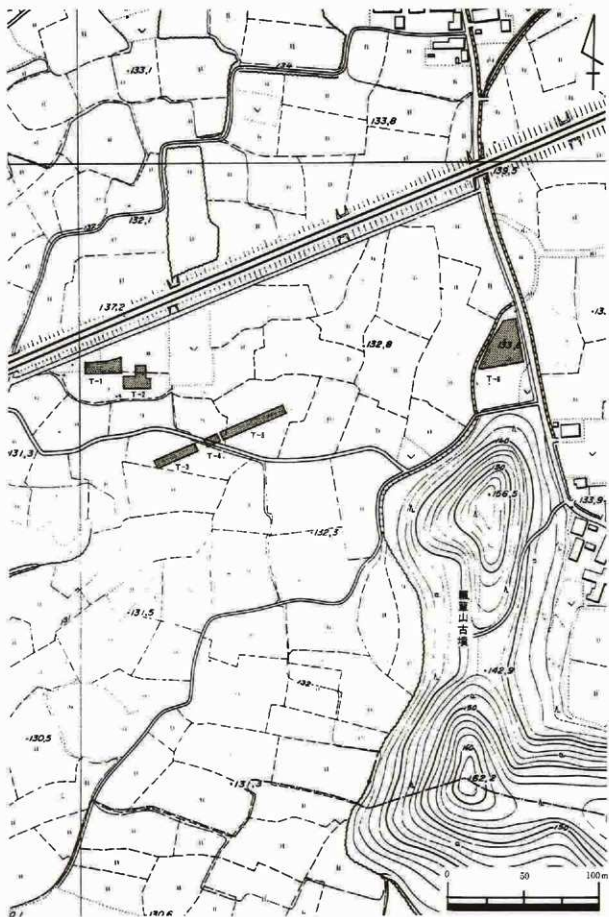
また、検出された建物跡の方位という点からみるならば、北方田中遺跡の建物群は、そのほとんどが $N-10^{\circ}\sim 20^{\circ}-W$ 前後を保っていると思われる。<sup>註②</sup> 比して当遺跡は、ほとんどの建物跡が同一の方位を保つものではなく、ほぼ真北に方位を保つ一群(SB-01~03)、西に方位を保つ一群(SB-04・05)、 $N-10^{\circ}\sim 20^{\circ}-W$ を計るSB-06・07の3群に分かれる。つまり、北方田中遺跡の建物群とほぼ同じ方位を保つ建物跡は、SB-06・SB-07であり、同時期の建物跡の可能性をもつものである。しかし、この建物跡関連からは、出土遺物が皆無であることから、その確固たる確証を得るものではない。

これらのことから、当遺跡は北方田中遺跡と共有する時間を有する時期から、やや後世にかけての集落遺跡と考えられる。ただ、出土遺物が僅少であり、出土地点もごく一部に限られている点が危惧される。

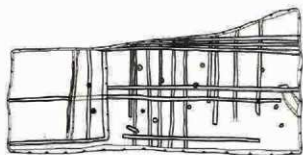
### 註

① 『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』 山東町教育委員会・勸遊賀県文化財保護協会 1986・3

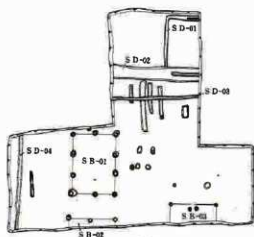
② 前 掲 ①



T-1~6トレンチ配置図



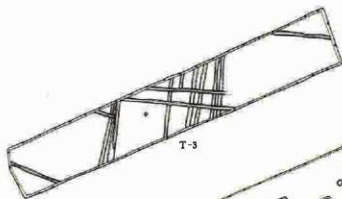
T-1



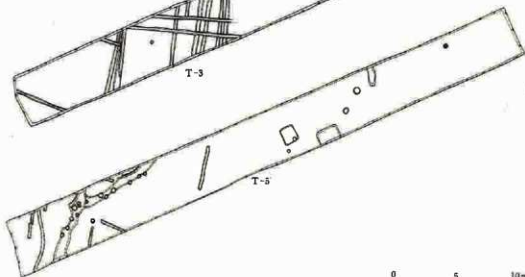
T-2



T-4



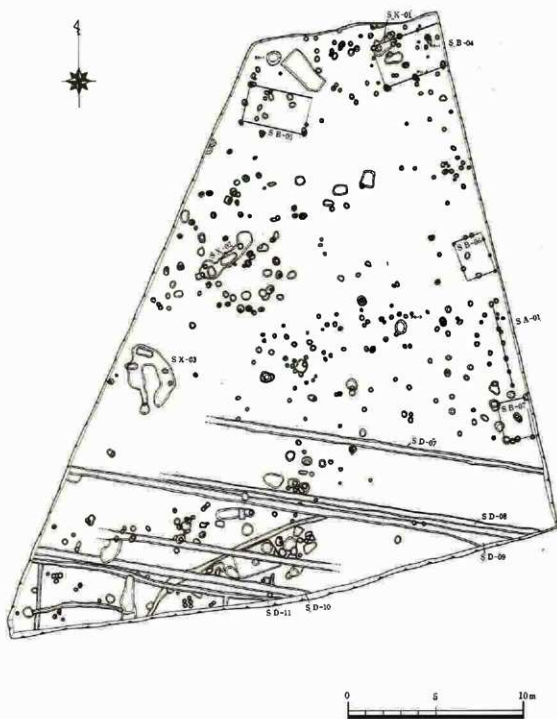
T-3



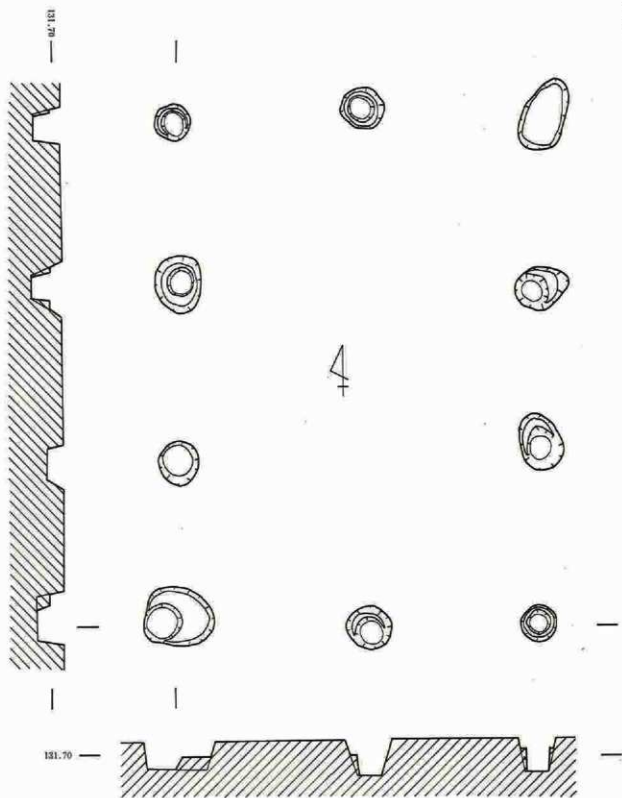
T-5



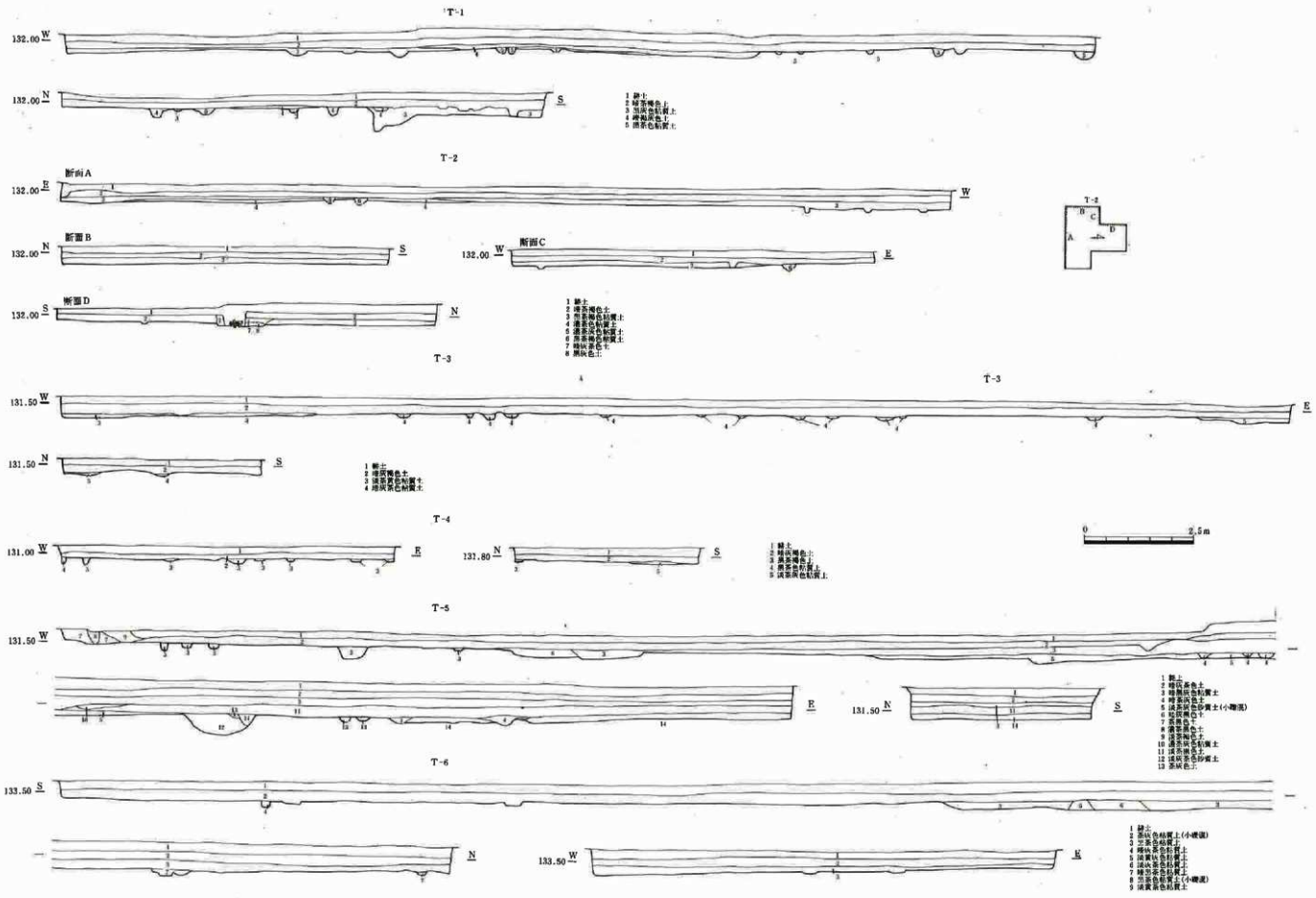
T-1~5 トレンチ遺構図



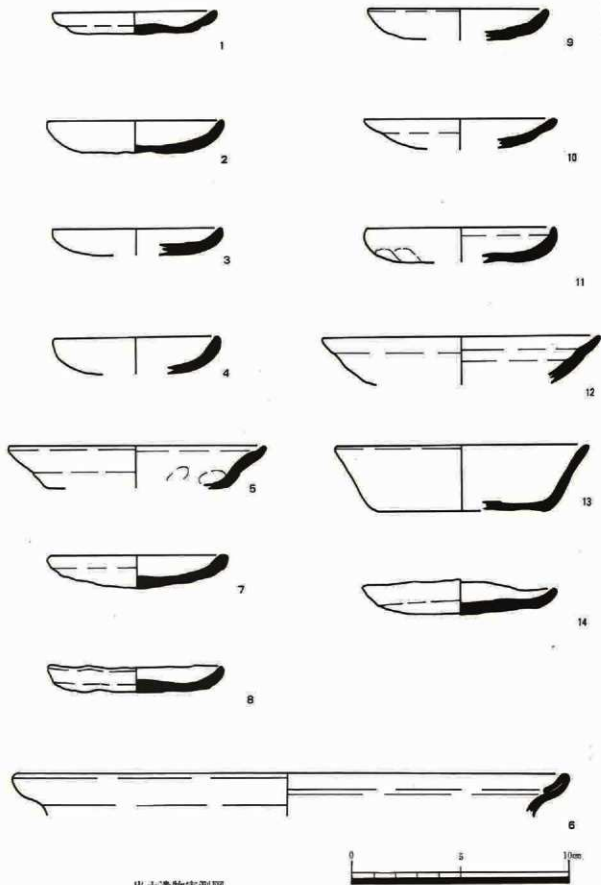
T-6 トレンチ遺構図



獨立柱建物跡 (SB-01)



T 1 ~ 6 トレンチ断面図



出土遺物実測図



調査地遠景



T-2 トレンチ SB-01 (南から)





T-5 トレンチ (西から)



T-6 トレンチ (東から)



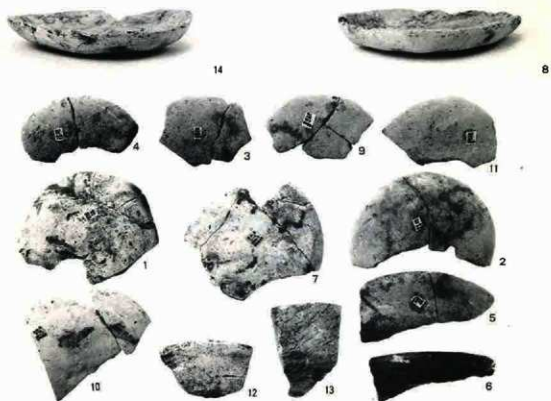
T-6 トレンチ (北東から)



T-6 トレンチ遺物検出状況



T-6 トレンチ全景



出上遺物

山東町埋蔵文化財調査報告書 V

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

発行 山東町教育委員会

滋賀県坂田郡山東町長岡1206

印刷 立木印刷

滋賀県坂田郡米原町藤井478-1